

芥川だより

現像なら、芥川商店街入口の

発行日 *** 2008年4月20日

e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

芥川だよりの定期購読をご希望の方にはお送りします。お気軽にお申し付けください

編集発行人 下村嘉明

発行所

着物から服を仕立てます

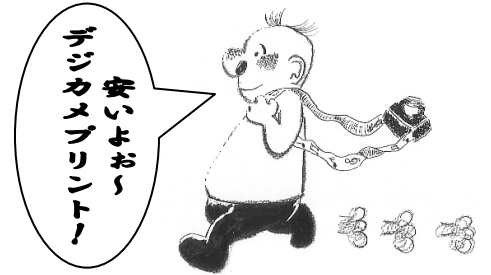


☆着物から服へ・リフォームオーダー☆

☆ポイントカードを初めて作りました☆

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870



芥川の写真屋さん



田植え

田ごしらえをされたうねに稲もみをまき、焼いたもみ殻をその上に薄くまく。カラスやスズメが食べないようにワラの覆いをかける。水のほり具合に気をつけて一ヶ月もすれば十五センチぐらいの苗が出来る。この苗を取り広い水田に植え替えるのが田植えである。田植えをする前の日には、家の者で苗取りをする。間に合わない時には近所の人に来て助けてもらう。田植えの日は、隣近所、親戚の女の人までも頼む。朝早くから夕方まで十人ほどが、田植える者、苗を運ぶ者、食べ物を用意する者にわかれて働く。田植えの主役は何と言っても、素早く植える女の人達である。

手負いを付け、日本手拭いを頭に巻き、素足で田の泥の中を動く。一列に並んだ植え手達は競うように休まず一枚の田を終える。チームワークの仕事だからマイペースは許されない。いつも親戚の叔母がリーダーとなり一日中、少しの休みも惜しんで植え続ける。日が暮れる頃には、おおかたの田には苗が水面から顔を出している風景になる。頼りない苗が水面からわずかに顔をだして風になびく様をみて秋に稲穂をたれるようになるとは想像出来ない。その夜は、親戚の叔母達は泊まるから、賑やかな夜になる。百姓の仕事は、助け合いでもっていたのである。

芥川商店街歳時記

4月29日 **こいのぼりフェスタ1000 イベント** **芥川桜公園**

5月11日 亀屋寄席 11時開園 森乃石松・笑福亭仁嬌・旭堂南陽

要予約 072-685-0123

5月3・4日 高槻ジャズストリート

今月の予定

*****いい人 いい街 いい笑顔*****

ご融資のことならお気軽にどんなことでもご相談ください。

摂津水都信用金庫芥川支店

TEL 072-681-1871 * FAX 072-681-7567

此の頃少し様子が変だなあと思いつけてから数ヶ月。突然イヤおうなしに振りかかってくる家族の介護。現実にはどのように向き合ってゆけばいいのか、とまどってしまおう。

いろんな手続きをして、やつとデイサービスにゆき、嬉しかったのか気持ちよくなったのか。「お世話になりました」と主人の口から出た言葉。二回目から気持ちよくデイサービスの車を出かけていく後ろ姿を見送る。午後三時ごろ、センターから電話がある。「病院へ連れて行く」との事。

何が起きたのかと長男と病院へ走る。あの言葉が最後で、何も言えないまま点滴で命をつなぐ現状。

家の中では杖をつき、トイレにゆく。失敗もし、おむつに交替、夜だけでもと着けて寝させて、見に行けば、完全に取除いて自分でハイハイしてでもトイレにゆく。そーっと見ていることの辛さ。思うように身体が変えられない。そのまま倒れる、起き上がれない。もがく姿、目を開けて見られる状態でなし。やつと手をそえてフトンの中へ入れ、無理やりおむつを取り付ける。

「静かに寝てや」とフトンを押さえて自分の部屋へ、でも気になって眠れるものでなし。胸さわぎがして見ると、完全におむつをはがし散らかって

いる。夜中でも大きな声を出して嫌がる。「ああ、いつまでつづくのよ。こんなこと。でも私がしてあげないと誰がするの」と言い聞かせて頑張る。無口だった主人は昔から親子の会話がなく双方から避けている様な態度だった。でも大声をあげたり倒れたり、おむつの交換など、見ていられない気がやる」と気持ちよく交代して取替えをしたり、杖となりして世話をしてくれる姿を見て、「血のつながりか、やっぱり我子か」と涙にくれる日が多い。私も子供に「ありがとう」と言いたい。

休みを利用して、病床に伏している父親の側にいてくれるようになった。ヒゲを剃ったり暖かいタオルで顔をふいたり。我子の隠れた優しい部分を見て涙する日々が続いている。

或るお寺へお参りし法話を聞く

いつもの自分だと右から左へと抜けて、よい話だったけれど、自分流にまとまらない。覚えていることだけ書いてみよう。

：或る日、お釈迦様がお弟子をつれて野道を歩いておられました。道の中程まで来られると、道のほとりの草むらに、お金を入れた袋が落ちていました。

お釈迦さまは、それを見て「まっすぐ前を見て歩きなさい。横をむいたら草むらに怖い蛇がとぐろを巻いている」と言われ足を早めて通り抜けられました。お弟子は何のことかわからず、お釈迦さまのおっしゃる通り、横をむかずに急いで後を追いました。

丁度その後へ通りかかった男が、急いで通り抜けて行かれた所は誰しも気になるもので、横をむいて草むらを見ると目もまばゆい黄金。「何と目のない人達だ。お金を蛇だと言って拾いもせずに通り抜けて行った。何と俺は運がいいのだ。こんな福をいただくとは」。男はホクホク喜んで、お金をすっかり拾い集めて、自分の家へ持ち帰った。思いかけない大金を拾い、急に気持ち大きくなり贅沢に日を送ったところが、それも束の間、間もなく役人が来てその男を縛り上げ、暗い牢獄へ投じた。

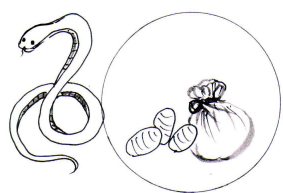
天から地へと逆落としをくらったその男は「なるほど蛇だった。あんなものに触れねばよかった」と悔やみつづけたという事です。(覚え書きより抜粋)

言の花

桃栗三年、柿八年という諺がある。桃と栗は芽生えから実を結ぶまで三年、柿に至っては八年。転じて何事も成就するまで長い時間がかかるという意味らしい。

このあとつづく言葉はいろいろあり、柚(ゆず)はおそくて十三年、桃は酸いとて十三年、枇杷(びわ)は九年でなりかねる。冷たい風が吹き時には雪さえ積もった庭から色鮮やかだった花が、知らぬ間に消えてしまった。

寒さの中あたため合うように寄り添って咲いている花も、私は思わず「よく頑張ったね」と植木鉢の土を上下に返してやる。畠にゆけば枇杷が天に向かって伸びてゆこうとしている。この時期初夏の実りにむけてひっそりと花を開く準備をしているらしい。根元を草がしっかりカバーして青々と元氣ばっているのに出会う。



ヒマラヤの話

梵店主

五月とはいえ、上高地の大正池から流れる梓川の縁の岩場に建つ古びた中崎山荘の別館は冷え冷えとしていた。本館で夕飯をたらふく食べ周囲の客の驚きを目にいささか恥じらいを覚えたよっちゃんには本館の風呂には入らず、石川さんを誘い仙人の湯といわれる岩風呂に行った。仙人の湯は岩をくりぬいた湯であり、灯りもなく真つ暗な洞窟の湯である。

石川さんはおもしろい人でお化けの冗談を言いながら湯に浸かっている。よっちゃんはヌルヌルした岩底に腰を下ろして硫黄のキツイ匂いを嗅ぎながら顔も見えない石川さんの声に聞き入った。

「ヒンズー語では水のことをパニというんだ。買い物で値切るときはアツチャーと言う。俺は遠征隊の偵察から登山するまでの間ネパールのカトマンズなどにいた。一年余りいたので、現地語であるヒンズー語でおよその事は話が出るようになっていった」と自慢げにいう。

よっちゃんは何も知らないヒマラヤの生活を聞きいった。「山を登るときはどうか」「あんな、高い山に登るときには、高山病にならないように一気に登ったらあかん。だいたい四千メートルぐらいの高さまで登ると、吐き気や頭痛で悩まさ

れるんだ。それから、水をたくさん飲む習慣をつけるようにするのが大事。

しかし、少しでも高度を下げれば治る。次に六千メートルぐらいできついのがある。この時も高度を下げるのが一番いい」と石川さんの話はつづくが、よっちゃんは湯に浸かりすぎてのぼせそうになったので「もう上がりましょうか」と言いながら洞窟から出た。

ふたりで暗い道を懐中電灯で照らしながら別館まで歩き、ガラス戸を開け裸電球がぶら下がっている座敷に坐った。十畳ばかりの薄汚れた畳の上にあぐらをか

いて坐る。部屋の片隅にフトンが積み上げられている。石川さんはザックから飲み残しのウイスキーを取り出した。「下村飲むか」と言いながら飲み始めた。「石川さん、山の食料の残りがありませんから出しますわ」。この部屋は貸切で一人二千元であった。

ウイスキーがなくなる頃にはタバコもなくなっていた。こうなると話は続かないからフトンを敷いて寝るしかない。

翌朝早く起きて、本館まで朝食を食べに行く。昨夜と同じように腹一杯食べた。石川さんがタクシー代も出してくれた。石川さんは東京の旅行社に勤めていたので松本駅で別れたが駅前の飯屋でもおごってくれた。

よっちゃんはどうゆうわけか石川さんを大変気に入ったのである。石川さんも

よっちゃんを気にかけてくれたのである。石川さんは無口であるがよっちゃんには気さくに話をした。

幾度となく酒を酌み交わし、山の計画を練り上げていくのである。

何が人生を変えるかわからない。人と人の出会いから物語が始まるとするならば、石川さんとよっちゃんの出会った穂高から一泊した山荘で聞いたヒマラヤの話の内容よりも、怖いと聞いていた先輩である石川さんの純でおもしろい性格に興味を持ったよっちゃんであった。

石川さんの山のロマンは、世界第二の高峰K2の未踏の西陵を登ることであった。その稜線は手付かずで登る者を拒んでいた。その急峻なルートをやるまえに是非やりたかったのがラカポシという山の北稜であった。

海外登山の計画をあれこれ考えていく中で、どうしても解決しなければならぬのが資金をどうして集めるか。隊員をどうするか。という大きな問題は未解決のまま、よっちゃんはヒマラヤの夢を大きくさせていった。

熱病にでもかかったかのように、ヒマラヤ、ヒマラヤ……と念じるように是非でも行く思いは強くなっていった。しかし、その夢を実現させるような状況にはなくて、実現不可能であるとよっちゃんには思われた。

女優・松井須磨子(2)

「ハムレット」の公演は、若い卒業生の演技は未熟で、全体が歌舞伎風の演出で新鮮味にかけていたという。夏目漱石が観にきていたが、途中で帰ってしまったらしい。

オフィリアの次に須磨子に与えられた役はイプセン「人形の家」の主人公ノラであった。明治四十四年(一九一〇)十一月、帝国劇場で行われた文芸協会第二回公演「人形の家」は大きな反響を呼んだ。須磨子にとつて、その後の女優人生を決定づける舞台であった。「人形の家」の翻訳者であり舞台演出をした島村抱月と急接近するのはこのときである。

弁護士としての安穩とした生活を送っていたノラは、ある事件をきっかけに、人形のように生きるより一人の人間として生きたいと願って、三人の子を捨てて家を出るのである。そういう生き方にたいして須磨子は「当時はやっぱり、自分の道を切開くためとはいえ、三人の子供の愛を犠牲にするということは、どうも同感出来にくうございまして。……けれども今の私は、悲しい事ながらノラの心持ちに同感せずには居られなくなりました」と述べている。「今の私」というのは、師と

の許されざる恋に苦しみ、どれほど憎まれようとも抱月との愛を貫こうとする須磨子である。

この年に青鞥を立ちあげた平塚らいてふや、歌人の与謝野晶子が「人形の家」の舞台を観ている。

らいてふはノラに宛てた私信のかたちで「十四、五の小娘なら知らず、三人の母親としてあろうとは、日本の女にはちよつと信じられません。……あなたの響かせたあのドアの音は、まったく威勢がようございました。しかし踏みだした戸外はあなたにとつて真暗でした」と批評する。晶子は「私であれば家に留まる、そして少しでもまわりを変えようと努力する。飛び出ることは簡単だ、しかし変えていかなければ」とノラの生き方を批判するのである。自らの子を産むことのなかった須磨子とちがいが、らいてふも晶子も子をもつ母であった。

第三回公演の演目はズーダーマンの「故郷」である。翻訳・演出は抱月、ヒロインのマグダは須磨子が演じた。マグダも自我にめざめた女、因習にとられない「新しい女」である。軍人の娘であるマグダは家出をしてオペラ歌手になった。故郷に帰って家に迎えられるが、都会で子どもまで産んでいることがわかってしまい、頑固一徹の父は、ふしだらな娘と激怒する。そんな父に反抗し、激しい口論となり、父は卒中で倒れて死ぬのである。マグダは須磨子のはまり役だった。抱月はマグダを、演劇のスターとなりながら親戚縁者や郷里の人から白い目で見られていた須磨子に重ねあわせていたのだろう。

四十五年五月、有楽座で封切られた「故郷」は開幕と同時に大入りだった。マグダはノラを上まわる好評を得たが、中日過ぎに観に来ていた内務省の官吏にクレームがつけられる。マグダが父親と激しく口論する場面が教育勅語の「父母ニ孝ニ」という趣旨に反するといふのである。内務省に上演を禁止され、協会は当惑するが、マグダが自分の罪を叫び、悔恨のセリフをいう場面に改めて、けつきよつく禁止が解かれるのだ。

須磨子は天分にぴったり合った女優という仕事を得て、新劇のスターとなつたが、世間の女優にたいする偏見は根づよかつた。親戚の軍人が、一門から女優が出たことを恥として激怒した。じつさい役者の中には求められて体を提供するものもいたのだ。艶聞も多かった。須磨子のライバル、女優養成所一期生の森律子は最愛の弟を自殺でなくしている。律子が弟と一高の学園祭に出かけたとき、弟の学友から女優である

がゆえの激しい侮辱を受けた。姉を慕い、女優についてともに考えた弟は学友の侮辱に堪えられず、踏切を飛び越えるのである。

抱月は、社会は女優にたいして根本的な誤解があるという。「女優は文士と同じく、他人の心理状態を表情の上にあらわす。文士が筆あらわすところを、せりふとしぐさだけで行う。それだけの違いである」。舞台の上で接吻や抱擁を演じる役柄を、女優の実生活にそのまま重ねてしまう誤解が、女優蔑視の根にあつた。

文芸協会は「故郷」を有楽座で上演した後、大阪、京都、名古屋を巡業した。京都南座の公演のとき、須磨子と抱月は互いの愛情をたしかめあい、結ばれるのである。須磨子二十六、抱月四十一であった。

抱月には妻子があつた。十六歳の長女をはじめ五人の子をもつ父親である。抱月は島村家の婿養子であり、学生時代から経済的な援助を養家から受けていた。四十まで女色に溺れることなくまじめな学究として過ごしてきた抱月は、希代の女優松井須磨子とあつい恋に落ちた。抱月と須磨子は正式に結婚することを誓いあう誓紙を残しているが、妻の市子は抱月との離婚をけつして認めようとしなかつた。須磨子が抱月を独り占めすることを許さなかつた。

空襲、疎開

戦争へ一億一心、子どもたちまで戦争の犠牲になっていきます。労働力が不足し、小学生から大学生まで工場や農村に動員されたのです。

戦争はますますは激しくなり、本土も空襲されるようになりました。都会の国民学校初等科の生徒たちは縁故のある田舎に疎開させられます。郷里がなく縁故疎開できない家庭の子供たちも農村に強制的に疎開させられました。学童疎開です。

私にはまだ小学五年生と三年生の妹が二人いました。二人は父と一緒に強制的に疎開を迫られたのです。東京に残った母から私のところに「身体の不自由になったお父さんの面倒をみるために、疎開先の長野へ行ってほしい」との連絡が年明けの三月にありました。

すぐといっても、学校の事務に支障をきたさないようにし、叔父である校長にお願いしなければなりません。折角馴れた仕事を整理して、淋しがる舅や姑と別れを惜しみながら、さっそく東京へ帰りました。

父と二人の妹が疎開している信州へ慰問に行つて欲しいという母のたつての頼みで、ゆつくりする間もなく長野へ向かうことにします。母と協力して

買出しした果物を背負つて疎開先へ行きました。

疎開先では、先生をはじめ生徒さんたちがとてもよろこんでくれました。妹二人は、私たちの傍へは寄らずに遠くにたたずんで、泣き出しそうな顔をしている姿がとても印象深く、いまもはつきり覚えています。四年生になっていた下の妹は「母と一緒に帰りたい」と泣き出したので私達と一緒に東京に帰ることになり、上の妹は「自分が帰ると先生が困るし、先生が可哀想だから先生と一緒に皆の面倒をみる」と遠くからいったのです。気丈にふるまう妹の姿を見つめるばかりで何もいえず、「これが断腸の思いか」と別れるつらさをかみしめました。自分の気持ちをそのまま言える下の妹の手を引いて帰途についたのです。

新橋の家に帰った、その晩のことです。やれやれと家にたどり着いて、夕食をすませすぐに横になりました。疲れてすっかり寝入っていた夜中、空襲のサイレンが鳴り響いたのです。家には身体の弱い姉が、寝たり起きたりの状態です。まず、その姉を安心できるところへ移動せねばなりません。その頃、物を運ぶにはリヤカーといて両輪の手押し車がありました。そのリヤカーの用意をして、姉を乗せ、外へ出た途端でした。

空襲サイレンのなか、「あら、どうしましよう」といつているうちに、空から赤い火の玉のようなものが落ちて来たのです。あとで知ったのですが、これが油脂焼夷弾といって日本の木造建築を攻撃するために開発された爆弾だとか。これが雨のように降ってきました。

焼夷弾の火が乾いた木片につけば、そこからバラバラと燃え広がります。火はたきで直ぐに消そうとしても間に合わず、またたく間に火の海となつてしまふのです。火はたきというのは、長い竹棒の先に荒縄をハタキ状にくくりつけた火消し道具で、水に浸して使います。表の道路では、バーンと大きな音が響き、ガラガラと建物が崩れてゆきます。それでも私と母は二人で、火はたきで火をたたき、火消しにまわりました。

火のまわりが早く、これ以上ここにいたら危険という状態になりましたので、私は姉を乗せたリヤカーを引いて、母妹と共に火が燃え広がっていない方角を目指して逃げました。家を出て皇居の隣は日比谷公園です。そちらのほうはまことに静かでした。空襲サイレンの音が消え、周囲が何となく静かになりましたので、リヤカーを引いて家に帰りました。

いたのですが、奇跡的に私の家を中心に五軒両隣だけが道をはさんで残っていたのです。残り火に照らし出されたわが家を見たとき、嬉しさが込みあげてきました。

前の道路を隔てて新橋駅へと広がる暗闇の中に、燃えくすぶる炎がところどころに見えています。また横の道路に並んでいた木造の家はなくなり、鉄骨の建物がわずかに残っているだけでした。遠くのほうまで眺められるほど一面焼け野原になっていたので。そんな悲惨な状況の中で、わが家が残っていたことは不幸中の幸いであり、本当に嬉しいことでした。

母と私は、少しでも早く父の疎開先の長野へ行ったほうが良いと考えました。そのとき何をもっていくのがいいか……思いついたもの、それは私にとつてとりわけ大事なものの、ミシンでした。ミシンがあれば、お世話になるみなさんに洋服を縫ってさしあげられます。かなり重いものですが、なにかと重宝するにちがいないと思つたのです。

母に手伝ってもらつてミシンを分解し、分けて運ぶことにしました。汽車は混んでいます。窓から私が先に乗り込み、母と共同作業で、胴体とリングに分けたミシンを汽車に運び込んだのです。いま考えてみると、よくもあんな

くな無茶なことをしたものだと思いません。そのときの私と母の姿を思い浮かべると、涙が出るほど恥かしい。

でも、ミシンを持って行ったおかげで疎開先で生きていける支えができたのです。生きる道をひらくには一生懸命になることがほんとうに大事だと思えました。

佐久駅で汽車を下ります。行き先はさらに一里ほど山の中へ入ったところ。バスも電車もないので、歩かなくてははいけません。重い荷物を背負い、二、三度行ったことがある母について歩きます。田んぼ道、坂道をひたすら歩いて一時間ほど、ようやく着きました。母も随分疲れたであろうと思いません。

久しぶりに再会した父も、高校に通っている妹も、とても喜んでくれました。お世話になっている家は、十年以上も店に勤めている番頭さんの実家でした。お兄さん、お姉さん、お母さん、お子さんと大家族です。私たちをころよく迎え、親切にお接待をしてくれました。白いご飯、お味噌汁、新鮮なお野菜と、久しぶりに美味しい料理をたくさん頂きました。

その日は、母も私もくたくたにくたびれた。ほんとうに静かな野山の中です。ああそうそう、近くにとてもきれいな小川が流れていました。

クイズの答

福嶋努

前号（二十一号）の「クイズ」の答は、正解はエ、雉子（キジ）です。

雉子は、昔から日本人には親しみのある鳥である。日本のあちこちを旅してまわった芭蕉にとっても、旅先で耳にする雉子の声は、親しみの持てるものであったに違いない。雉子は、その後、その後、昭和年代に入って、二十二年（一九四七年）に日本の国鳥として指定されている。この頃でも芥川周辺では、雉子の姿をときどき見かけることがある。

汚染される環境と人体⑥ アルツハイマーと金属汚染

山彦彦彦

最近、あるテレビ番組でアルツハイマーに関するたいへん興味深い放送がありました。それは、メキシコのとある村で若年性アルツハイマーが多発しているという事例でした。村の人口三万人中、一五〇〇人も住民が若年性アルツハイマーにかかっていたのです。しかも家族性が強く、一家で何人も家族が死亡しないし障害者となっていました。

この謎は、過去のエピソッドと現在進みつつある生化学的研究を組み合わせ解き明かすことが可能です。そのエピソッドから捉えた特徴的な生化学研究は、山形大学理学部教授の西田雄三氏の著書『BSEの化学 金属イオンと神経疾患』（牧歌舎）に紹介されております。

昔から特定の神経疾患が多発する地域があることは知られていました。パーキンソン氏病や筋萎縮性側索硬化症、アルツハイマーがニューギニアやグアムなどの一部の地域に多発していますし、また日本にもそういう地域が過去にありました。それらの地域で共通しているのは、**地下水にアルミニウム**

ムイオンやマンガニオンが多く含まれていることです。幸いにも、そのようなイオン分が多い井戸水から天水や水道水に替えることで、下火になりました。

現在静かに広がりつつある狂牛病にも、同様の傾向があるのです。狂牛病はプリオンというタンパク質の異常によつて引き起こされますが、それは牛（狂牛病）だけに限らず、羊（スクレイピー）や人間（クロイツフェルト・ヤコブ病）、鹿（CWD）にも発症します。

羊のスクレイピーは記録上では二五〇年以上も昔から知られた家畜病ですが、その特徴は発症に地域特異性があることです。アイスランドやスロバキア、コロラドなどで発症し、「風土病」として忌み嫌われていたのです。

それらの地域に共通する点は、地下水にアルミニウムやマンガンのイオンが多く含まれていることです。鹿のCWDが発症する地域も全く同じことが明らかにされています。ねじれを持ったプリオンのタンパク質分子が平面となつて異常な増殖をするのは、その巨大な分子にそれらの金属元素が結びつくことが原因だったのです。

パーキンソン氏病やアルツハイマーでは、脳に異常な鉄イオンの蓄積が見られ、クロイツフェルト・ヤコブ病

患者やスクレイピーの羊には脳にマンガネイオンが多いことも判明しています。これらのことから西田教授らは神経疾患に金属イオンが関係していると考え研究を進めており、重大な事実が判明しています。

さて、脳や神経が正常に働くには神経伝達物質の働きが重要になります。

その神経伝達物質の一つドーパミンを例にすると、必須アミノ酸のフェニルアラニンから酵素の働きによる生化学反応で、何段階も経て作られます。フェニルアラニン→酵素1→チロシン→酵素2→ドーパ→酵素↓ドーパミン→酵素↓ノルアドレナリン→酵素↓アドレナリン……と続いていきます。

ここで重要なのは各段階の反応に於いて各酵素が必要となることです。たとえば酵素1はフェニルアラニン水酸化酵素、酵素2はチロシン水酸化酵素であり、その働きに酵素分子中の鉄元素の触媒作用が必要不可欠となります。

私達の体は7・3の弱アルカリ性に保たれており、普通の場合では金属はイオンの状態では運ぶことができません、各必須の金属ごとに、たとえば鉄ではトランスフェリンという運搬体（銅ではシヤペロン）分子の働きが重要となります。そしてそのトランスフェリンは鉄だけに親和性があるのではなくア

ルミやマンガンにも親和性が（電子配列の関係から）あるのです。

酵素の働きに戻りますが、フェニルアラニン水酸化酵素やチロシン水酸化酵素は運搬体で運ばれた異種金属にも親和性があり、最も重要なことは、目的の金属元素以外と結びついてしまった酵素は酵素として働かなくなるということです。これは異種金属の侵入で脳の活動に必須な神経伝達物質が作られなくなるという恐るべき結果をもたらします。トリプトファンから作られるセロトニンについても同様の機序があります。

重要な神経伝達物質ができない状態で、私達の体は酵素の鉄イオンが不足していると誤認し、トランスフェリンに鉄を運ぶように指令します。しかし、もう既に目的の酵素には鉄以外のアルミやマンガンなどが結びついており、鉄は過剰となり、脳内の細胞に捨てられて鉄過剰症となります。その鉄がアミノ酸やペプチドの作用で水溶性の

「水溶性二核鉄（Ⅲ）種」となるのです。この水溶性二核鉄（Ⅲ）種は酸素と協働して強力な酸化ストレスとなり脳の細胞死を起こさせるわけです。あるいはその他の異常な分子を脳細胞に蓄積させ「ベータアミロイド・老人斑」となるのです。

そして今まで知られていなかった驚

くべき事実が、ここ一〇年の脳科学の進歩で分かってきました。それは、脳の中で神経細胞を支え、栄養を補給するだけと考えられてきたグリア細胞が、実は神経細胞と同等な相補完する重要な働きをしていることです。

グリア細胞は四種類が知られています。アルツハイマーで問題となるのは免疫細胞から分化した「ミクログリア」です。ごく最近の研究で、ミクログリアが活性化すると、なんとベータアミロイドが蓄積した脳細胞を非自己とみなして攻撃・貪食していることが分かったのです。それによって脳細胞が掃除されて萎縮していったのです。アルツハイマーでは特に記憶や学習を司る

「海馬」が攻撃を受けていました。ただマウスの実験段階ですが、発病したマウスに免疫抑制剤を投与することで、明らかにアルツハイマーの進行が止められていました。筋萎縮性側索硬化症でも末梢神経からのミクログリアの破壊が判明しつつあります。

地域特異性はアルミやマンガンの偏在にあることが分かりました。ではなぜ家族性（遺伝性？）があるのかは、一つの重要な仮説が有力となります。

人間には多数の有害な金属から自己を守るために遠い祖先から受け継がれてきた「メタロチオネイン」という解毒酵素があります。そしてこの酵素は

個人差が強く、その活性の強弱は遺伝します。このことが地域性のみならず、「家族性」に現れているのでしよう。

西田教授は、酸性雨によって土中の有害な金属がイオン化して地下水に流れ込むことがこれらの根本的な原因であると警告されています。たとえアルツハイマーが免疫抑制剤によって進行が止まっても、この人体汚染を解決しないことには問題は先送りされるだけです。そして免疫抑制剤によって別の重大な問題が生じます。免疫によって抑制されてきたガン細胞が増殖することです。すでにアトピーで使用されている免疫抑制剤「プロトピック」で悪性リンパ腫が発症した事例が京都の島津医師から報告されています。

私達は産業文明の利便性を享受すると共に、その引き起こす環境汚染によって明らかに危険で静かなカタストロフィーに進もうとしているのです。

いつだったか不図こんな風に思った。もしお月さんが無ければ、日本の文化も随分違ったものに成ったことだろうと。

今時の歌は殆ど知らないが、昔流行っていた歌にはよくお月さんが出てくる。♪月がわびしい路地裏の♪「チヤンチキおけさ」、♪包丁一本晒に巻いて♪と「月の法善寺横丁」、いずれも私が好きな歌だ。この他にも「月の砂漠」、「祇園小唄」や「名月赤城の子守唄」等々。これを読んで頂いている方、お月さんが出てくる歌を口ずさんでください、結構たくさんありませんか。こんなのもありましたね、♪月がとつても青いから♪。NHK火曜日の歌謡ショーになってしまいました（この番組好きなので）。

これらの歌が何故流行ったのだろう。思うに月を介在させることにより、二者の関係から三者の關係に、線から面に広がり、結果その詩に情感豊かな深まりが生まれたのではなからうか。月があることでその歌の心情や光景が浮かんで来る。何とも不思議である。月がなければ地球の有り様そのものが物理的に違っていたのだろうし、また陰とか陽とかいった事柄もあるう

が、それらのことは度外視（宇宙物理のことは分からないから）。

もし月が無かったなら、この様な歌も「月光仮面」、「月形龍之介」、「素浪人月影兵庫」も古くは「竹取物語」も「月光菩薩」も生まれることはなかった。日光仮面では格好つかない。日形や日影ではパットしない。かぐや姫も火星や金星では帰るに遠すぎる。きつと「程よい距離」なのだ。また京都には「渡月橋」（嵐山）や「観月橋」（伏見）と命名された橋もあるが、それも無かったことになる。

私は子供の頃より月を仰ぎ見るのが好きだった。山里には外灯も殆どなく、夜は灯のない本物の夜になる。夜空に輝く月は、田圃も畑も周りの木々も満遍なく照らし出す。昼とは全く異なる情景を作り出してくれる。地上の姿に変わりは無いのに月の光に当たると総てが違って見える。月の光は柔らかい。月の光は穏やかだ。月の光はおくゆかしい。無言でひっそりと包んでくれるように感じられる。そんな空間に身を置くことが楽しみの一つだった。

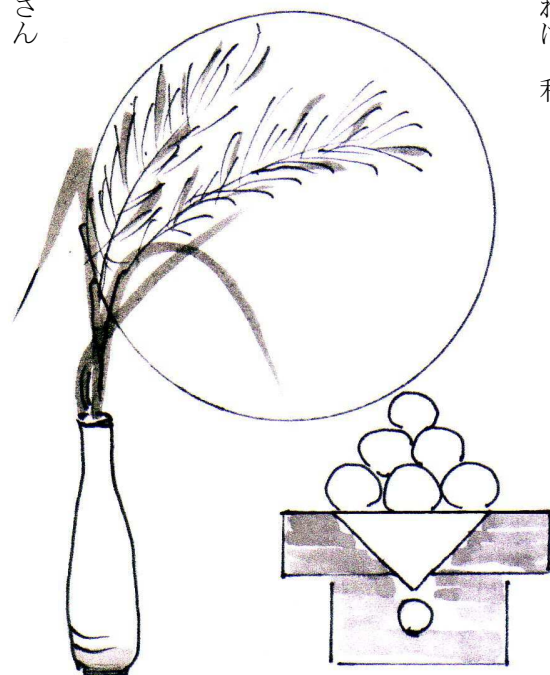
ところで私が知らないだけだろうが、最近お月さんが登場することが少なくなつたのではなからうか。何故だろう、アポロの月面着陸が影響しているのだろうか。それは一九六九年、昭和四十四年の出来事、既に三十九年前

になる。翌昭和四十五年の大阪万博に

「月の石」が展示されたとの記憶がある（私はこの年浪人中だった）。それにより月への認識が変わり、人の思いも変わってしまったのであろうか。この万博の年は、三島由紀夫の割腹事件や東京大学安田講堂での学生と機動隊との衝突があった。昭和四十五年を境にして何かが変わつたようにも思われる。この後直に角栄さんの「日本列島改造論」や「オイルショック」が席卷する時代となつていった。

時代が如何に変わろうが、あの月は山里で見たお月さんのままである。何も変わらずそこにある。今日の日まで、行き詰まったり、悩んだり、心重くなつたりすると夜空を眺めて来た。すると己の小ささを教えてくれる。これ如きに何をよくよしているのかと気付かされる。大宇宙の規模からすれば、私の悩みなど余りにも小さい、有っても無くてもいいではないかと納得する。

心惹かれ
た人有ると
きもまた月を
仰ぎ見てきた。
♪りんご畑のお月さん



こんばんは 噂を聞いたら教えておくれよな♪の歌とほとんど変わらぬ。可愛いものや愛しいものにはもつと近づきたいと思うが人の常だろう。親子兄弟、夫婦や恋人、知人友人、愛玩動物、隣近所に組織や仕事仲間とたくさんの中において、「程よい距離」を作るのが難しい。近づき過ぎても離れすぎてもいけない。つい忘れてしまうが、適度の距離から良い間柄が生まれてくる。お月さんは、「程よい距離」を保ち私達をずっと見てくれている。やはり神秘は神秘としてあるがよい。

今夜は出るだろうか、今夜は何を語りかけよう、今夜は何を歌おう。

前二十一号の「私の岐路」で十六年前に九州から関西へ就職のため赴任してきたというお話をしましたが、今回は私が感じた九州と関西の違いについて少しお話しします。

「九州の人って穏やか」とか「人がいいね」とつてことを、私は関西に来て何度も言われたことがあります。これは誉め言葉なのだろうか？ それとも軽くドン臭いと言われているのだろうか？ 勿論そう感じる方、そうではない方、それは様々だと思います。しかし少々時間の流れが違うのではないだろうか？

何年か前にテレビで放送された番組のことを思い出しました。その番組内容はストップウォッチで一分間を計る「体内時計」という内容でしたが、日本を縦に大まかに分けて時間を計る。沖縄人はいつまで経っても一分間を感じない。ストップウォッチを押すまでに平均は二分位、長い人だと三分位はボタンを押さずにいる。対照的に関東で同じ実験をすると、スタートしただけでストップウォッチを止めるんです。比較すればこれだけ時間の差がはつきり表れるものなんです。やはり時間の感じ方は住む環境の影響も

あるのだろうかと考えさせられます。

故郷である九州に帰省した時は関西にいる時とは違う感覚があります。それは時間の流れがゆるやか……こんな感覚になる事って、自宅と会社の往復する生活の中ではなかなか無い事ですね。身近なことから比較すれば楽しい問題もでてくるんだろうな。

田舎にいる時って細い農道をのんびり歩くのが好きで、しかも草が茂っている農道はなぜか落ち着くんです。草も「雑草」つて一言で片付けられればそれでいいけど、「みどり」つてとらえれば誰だって悪い印象は持たないのではないかと。単語で印象の与え方がこんなにも変わってくるもんなんですよ！

だから方言も同じことで、関西弁の印象はきちんと舗装されてる道路で、田舎の方言はまだ舗装されていない道みたいなのかな。地域により受ける言葉の印象には違いがありますが、私は「なんでやねん」とか普段自分が言い慣れない言葉がやけに気に入って。まだ子供の頃にテレビで観た吉本新喜劇、本当に凄いい衝撃でしたね。本当にこんな言葉を日常で喋ることがあるのか……って。少し大袈裟に言えば関西はリズム感のある話し方なのか。京都の年輩の方々はとてもキレイな言葉を使っておられ、ゆっくりとした話し方は素敵で憧れます。

私は短い期間でしたが京都で生活したことがあります。なぜ京都に住みた

かと思つたのかを周囲の人に聞かれたことがあります。自身の中で京都は生涯一度は住んでみたい町だと思つてました。私の田舎はおこがましくも九州の「小京都」と言われております。昔ながらの石畳の町並みが今も残りま

す。某鉄道会社の旅行プランに「九州の小京都」と出てくる程の味わい深い町並み、「男はつらいよ」でのロケ地にもなった寂れた町、夜は七時にもなれば町中は真つ暗になりますが、私はそんな田舎町が好きです。だから京都に

来ても関西弁を喋れない私ですが、それでも問題ないです。なぜなら自分には一番自然に話せる話し方があるのですから。十六年関西に住んでも、電話で両親と会話すればすぐに方言が戻ります。自分はこれでいいんです。方言っていいですよ……

母が死んだ。五年前から公立の老人ホームに入居していた。腕の骨を折つたのがきっかけだった。ひとり暮らしができませんので、兄弟で交代で泊り込んで介護を始めた。

しかし、すぐ体力が続かなくなった。夜中に何度も起きて便所に連れていくので寝不足になった。会社を辞めて、介護に専念する覚悟が要る、と思つた。妻の介護の為に辞職した高槻市長の事も頭をよぎった。

そんな折、担当のケアマネージャーの推薦で、入居出来た。幸運だった。制度が変わって、介護の必要性の高い人から優先的に入居出来るように変わったからだ。それまでの申請順では、三百人待ちと言われていた。

介護は命がけでないとできない。それを身内の代わりにやってくれる人たちは仏だと思つた。(龍)



貴方の思いをお寄せください。

一八〇〇二五〇文字位で

貴方の心のつぶやきをお送り下さい

昨夜、NHKの気象予報士は、明日は昼ごろから天候は回復に向かうであろうと自信ありげに予測していた。しかし、そんな気配は露ほどにも感じられない。あたりは深い霧がたちこめ、西から吹きつけてくる風にはみぞれらしきものが混っている。一年でいちばん寒いはずの二月上旬にもかかわらず、気温はさほど低くない。二、三度といったところだろうか。

われわれ八人は午前十時前、昨夜宿泊した比良ロジからそのまま下山する五人の先輩諸氏に別れを告げ、蓬萊山に向けて出発した。ロジのぎわいから、山の静寂の中に足を踏み入れていく。だれもが久しぶりの雪山である。

積雪は深いところで一メートル五十、昨夕から降り続いた雨がたつぷりしみこんだ雪は、われわれの歩行を難儀なものにさせる。足をとられて転ぶものもあれば、深く腰まで沈められるものもある。天気は悪く、雪の状態もけつしてよいとはいえない。が、これも、気まぐれで多様に変化する山の表情の一つだ。

齢七十になんなんとするムロ爺は、マイペースで淡々と歩を進めながらも、遅れない。昨夜遅くまで仕事をし、今朝五時に起きて飛び入り参加したというY場もその足どりはしっか

りしている。体力がいちばん心配された、太鼓腹の見苦しいよっちゃん、思いのほか快調である。昨夜遅くまで飲んでいたヨシは、寝不足とアルコールの抜けきらない体ながらも、足どりは軽い。いつもの軽口も好調だ。若手、といっても今年不惑の歳を迎えるNマサとY太は、先頭に立ってラッセルをし、ルートを拓いてゆく。ガスに覆われて視界が悪くとも、雪が腐って歩きにくくとも、だれもが懐かしい雪山の味わいをかみしめているようだ。

金糞峠に着いたわれわれは最初の休息をとった。峠を行き交うパーティと挨拶を交わす。正面谷から登ってきたおばさんパーティは、湯気が立ちのぼる豊満な体を揺らしながら、武奈ヶ岳に向かって、かしましく通りすぎてゆく。三人の中老年パーティは無愛想に主稜線を南に進んでゆく。

そして、突然……、物の怪にでも取り憑かれたのだろうか、ものいわずM蔵がおもむろに歩きはじめた、谷から吹き上げてくる冷たい風に背を押されるように……。

M蔵が十メートルほど登ったあたりで、山猿が後に続く。二人が山行を共にするのは三十年ぶりだろうか、短い足を運ぶM蔵の後ろ姿が山猿にはむしろ懐かしかった。急な登りが緩くなつてしばらくすると、Y太が追いついた。その後ろにつづく人影はない。稜線から少しはずれ、林の中に入る

と、先ほどまで吹きつけていた風がぴたりとやむ。静謐の中で、雪をかむ登山靴のきしみ音だけが響く。峠から五分ほどで、堂満岳へ向かう分岐点にきた。あたりは静かだ。

Y太は、分岐点から予定ルートどおりに右手にトラバースしはじめた。立ち止まってその動きを眺めていたM蔵は、視線を足もとにおとし、ひとつ白いため息をつく。軽く足踏みをしてから、低い声でY太を呼びとめた。そしてストックを強く握りなおし、面を上げながら切っ先を堂満に向けた。その判断に一点の迷いもない。

ガスにおおわれた堂満岳の頂きに鋭い視線を向けるM蔵の瞳の奥に、山屋としての熱き思いがたぎっていた。その思いがすでに沸点に達していることを敏感に感じとったY太は、すぐさま行動に移す。Y太も山屋の端くれだ。

これから果たされる堂満岳登頂の喜びが、ステップを刻むY太の全身からほとばしり出るのをM蔵は見逃さなかった。

霊験あらたかな堂満岳に立つという、今回の山行計画に秘められた最大の目標が、ついに果たされるのだ。山猿も腹の底から沸きあがる興奮を抑えようがなかった。もはや三人を遮るものはない。雹が降ろうが、槍が降ろうが、たとえテポドンが飛んでこようが、ひるまない。

なぜに、堂満岳はこれほどわれわれ岳人を惹きつけてやまないのか。

定年後

明石 幸次郎

サラリーマンにとって定年以降をどう

生きるかは大きな問題です。“人生五〇歳、下天は夢か幻か”の時代であればサラリーマンとして現役のまままで死んで行けたのでありましようが、今や我々男性も人生八〇歳、定年後も二〇年は生きられると言うか、生きなければいけない時代です。生きるのであれば、誰しも定年後はのんびりと愉快に、現役時代は出来なかつた好きなことをして余生を送り、お迎えが来たら、家族に看取られて、ぼつくりと死にたいと考えます。

しかし、現実はそのような甘いものではないようです。年金を含む経済的な問題、老親の介護、子供の自立、自己の生き甲斐の消失などの問題もありますが、それよりも定年後は、連れ合いとの関係をどう保つかが最大の問題になるようです。現に半定年状態にある私も正直言いますと、連れ合いと良い関係を如何に保つかを、日々考えさせられています。

先日、隣の市が主催した“団塊・シニアの為に定年後の生活設計術”というテーマの講演会を聴きに行きました。平日であったため参加者三〇人位で、私以外は六〇歳以上で、中には七〇歳を超えるシニアもいました。

講演の内容は、正に私が考えていた事

と同様な、妻との関係を如何に良好に保つかという方法と、妻が夫を定年後はどの様に思っているかという現状認識についてでありました。

そこで改めて認識したことは、我々男は、動物のオス親と同じであるということとです。オスは獲物を取ってくることで、その存在を認めてもらえ、自らもその役割を果たすことで、生き甲斐と家族の中の居場所を見出せるということであり、サラリーマンも現役の時は、毎月の給料と言う労働の対価を獲物として貰ってくるから、妻を含めた家族から、夫、父親としての存在を認めて貰えるのであります。この給料が貰えなくなる定年以降の男は、獲物を取って来られなくなつたオスと同じで、存在価値が変わつてしまふのです。男がそれを認識することで、如何にして、その存在を確保していくかがポイントです。それは、妻との関係を良好に保てるかにかかっているというこのようです。

団塊世代の夫と妻の定年に対する調査では、定年が楽しみと言うのが夫は八五%に対し、妻は四〇%が憂鬱であると言ふ結果が出ています。旅行は誰と行きたいかは、夫は夫婦でが七四%に対し、妻は友達とが四五%で、夫婦では三三%という数字が出ています。夫婦のお互いに対する意識のズレはこの調査を見ても

明らかです。

妻の本音は、夫の定年後も今までの生活のペースは崩したくなく、出来れば家事、食事の世話、夫に対する雑用からは、夫が会社の仕事から解放されたと同様に、解放されたいということとです。夫は

会社に、解放されたいということとです。夫は会社にいく必要がなくなり、会社の代わりに毎日出掛ける所もなく、そのため家にいる時間が長くなります。そうすると妻の行動が気になり出し、食事はどうするのか、妻が出掛ける時は何処に誰と何をしに行くのか帰りは何時になるのかと余計なことまで、ついつい聞いたりしてしまいます。妻にとっては以前からそうしていたので、生活のパターンは何ら変わりませんが、このまま夫がずーと家に居たら定年前からなじんだ妻の生活のパターンが崩されそうに感じます。夫は定年したから、家でのんびりして、妻にもっと慰労をして貰い、上げ膳据え膳で大事に扱って貰えると錯覚をしているんですね。ここに、夫婦のずれが生じて（以前からあったのに、お互い仕事を隠れ蓑にして、表面化して来なかつただけ）お互いの不満と不信をぶつけてしまっています。

統計によると、夫の定年とともに離婚に至る定年離婚や、熟年離婚が四万五千件（結婚二〇年以上）を超して、何と三〇年前の約七倍近くにも増加しているのです。

因みに離婚は妻から言い出すのが圧倒的に多いそうです。年金の妻への分割が可能になった現在、妻から三下り半を突き付けられる、熟年離婚件数が更に増えると言われています。

この離婚と言う男にとっての最悪の状況を回避する方策は、夫婦のコミュニケーションを良くして、夫が妻の家事を分担しながら、妻の負担を軽くして、夫の生活自立度を高めることにあるらしいのです。ここに、講演会の時の資料を引用させてもらい“夫の生活自立度チェック項目”を上げますが、一〇個以下の男性は心してこの自立度を上げなければ、定年後の生活はイバラの道を歩かなければならないかもしれません。

- ① ご飯を炊くことが出来る。
- ② 自分で飲むお茶は自分で入れる。
- ③ 夕食の材料を一人で揃えることが出来る。
- ④ よく一人でスーパーに買い物に行く。
- ⑤ テキストなしで作れる料理が10種類以上ある。
- ⑥ 週に5度以上、食後の後片付けをしている。
- ⑦ 電気掃除機を使うことが出来る。
- ⑧ トイレの掃除をよくする。
- ⑨ ワイシャツのボタン付けが出来る。
- ⑩ 人目を気にせず洗濯物を干すことが出来る。

- ⑪ 自分のワイシャツに自分でアイロンをかける。
 - ⑫ 自分の背広・ネクタイ・靴下・下着がどこにあるか分かる。
 - ⑬ 自分の服は自分で買う。
 - ⑭ 住んでる地域のゴミ収集の分別方法を正確に知っている。
 - ⑮ 役所への諸届けはひと通り出来る。
 - ⑯ 自治会などの回覧は必ず読む。
 - ⑰ 地域で今問題になっていることをひとつ以上あげることが出来る。
 - ⑱ 会々と挨拶をする地域の知り合いが一〇人以上いる。
 - ⑲ 仕事以外の親しい友人が何人かいる。
 - ⑳ 自分なりの趣味を持っている。
- この二〇項目に加え、最後に大事なこととして、妻とのコミュニケーションを良くすることをあげていました。妻の自分に対する不満をはっきりと聞き、問題を受け止めて、妻と向き合うこと。それと、妻に対する思いやりの気持ちを持つことと言うことでした。更に具体的には妻の良い点を知り、欠点は片目をつぶり、反対に自分の欠点はよく認識すること、思いやりの気持ちは、言葉と行動に出すことが大事であると講師は強調していました。因みにこの講師は自身の六〇歳の自立度の高い方でした。

俳句

蓑女

- 桜ちり薄紅色の溜水
- 商店街春のころを届けよう
あそび
- 主なく名もなき桜はかなげに

晶

- みちのくは梅と桜がならび咲く
- 落椿老杉燈籠男坂
- 松島は奇島怪島松の芯

編集後記

「魚あれこれ」を連載していただいた周防春日丸さんが少しお休みされました。評判の良かっただけに残念ですが、近いうちに更に楽しい投稿を寄せていただく事を期待して「魚あれこれ」を冊子にして発行する計画です。

投稿していただくだけでなく幾度も瀬戸内の獲れたての鯛や蛸、みかんまでも沢山送ってもらい商店街の皆さんや「芥川だより」の関係者の方々に美味しく食べていただきました。投稿記事と共に瀬戸内の香りを届けていただきました。本当にありがとうございます。

神農さんとお茶

野山に産する植物、果物、きのこなどの安全性は、いつ頃どなたが確認してくれたのでしょうか。

むかし中国の神農さんが野山を駆け巡って収集し一つ一つを食して安全性のテストをしてくれたと伝えられています。でも有害な物に出会った時は大変でした。すぐ解毒処置をとらねばなりません。そんな時茶葉がその役目をしたと伝えられています。茶葉の抗菌成分が解毒剤になったとのことです。神農尊は今も大阪の道修町（薬の会社の多い街）の一角に薬の神様として崇拜されて祀られているのです。

茶はTEAと称し世界の共通語であります。東洋に産し世界中の貿易品でありました。お茶は人体にとっても有益な飲み物です。

いつでもどこでもお茶を飲んでリフレッシュ。無意識に飲んでるお茶は昔も今も薬用成分が豊富でカロリーゼロの有難いドリンク剤です。

NPO法人日本茶アドバイザー。ア1-0186号

静岡県産の早場所の露地物

走り新茶・・・100g ¥2,000 をサービス価格 **¥1,800** (4月24日発売)

手摘み新茶・・・100g ¥1,500 をサービス価格 **¥1,350** (4月28日発売)

八十八夜摘み新茶・・・100g ¥1,200 をサービス価格 **¥1,080** (5月2日発売)

八十八夜摘み新粉茶・・・1kg ¥6,000 をサービス価格 **¥5,400** (5月2日発売)

いづれも内装は真空パックでギフトに好適の仕様です